

私と直島の25年

2013年4月30日
NHKラジオ



安藤 忠雄(あんどうただお、1941年(昭和16年)9月13日-)は、日本の建築家。
大阪府大阪市港区生まれ、同市旭区出身。
一級建築士(登録番号第79912号)。東京大学名誉教授。
21世紀臨調特別顧問、東日本大震災復興構想会議議長代理、大阪府・大阪市特別顧問。

コンクリート打ち放しの独創的な建築で世界的に有名な建築家・安藤忠雄。

建築家・安藤忠雄の拠点は阪にある。安藤忠雄建築研究所では、30人のスタッフで国内外のプロジェクトを抱えている。

安藤が香川県の直島(岡山から四国への最初の島)で建築を始めたのは25年前、依頼したのは福武総一郎で、安藤は最初は難しいと思ったことを話した。安藤はまずベネッセハウスミュージアムなどを完成させた。

安藤は場所が持っている力があるので、この場所でしかない建築を作ろうと思ったことを語った。今では海外から観光客が来るほど賑わっている。直島に通っていた安藤は島の町並みに愛着が湧いていった。

3年に一度開かれる瀬戸内国際芸術祭(3月-11月)の開催に合わせ、香川県の直島で集大成とも言える「ANDOU MUSEUM」(安藤忠雄氏の建築模型や図面などを展示する)が完成した。2013年3月12日。安藤が設計した建築は島内で8件目。海美しく、緑多く島全体を芸術の島にしたいと思っている。

香川県の直島は町のあちこちに芸術作品が並ぶ芸術の街。中心の本村地区は当時に佇まいが残されている。

瀬戸内国際芸術祭は香川県西部の本島や粟島など、新たに5つの島を加えた香川県と岡山県の島など、14か所を会場に春、夏、秋の3つの季節に分けて開かれる。

「ANDOU MUSEUM」は築100年の古民家をリフォームしてつくられた。ももとの柱や外壁、瓦などを活用し、コンクリート建築と融合させる、これまでにない挑戦。

25年前、2500人の直島に今、年間40万人の人が訪れる。70歳を超えた島民が人が変わったように働き始めた。コーヒー屋、ウドン屋……などを開業し、島へ来た人々と接している。

渋谷のヒカリエの下に駅を作った。地下30m下。CO2排出ゼロ。自然の風と鉄道の風を使って究極のエコハウスがヒカリエにつながっている。

日本で工場が外国に出て行った頃、海を綺麗に、空気を綺麗にしようと思い、木を植え、循環的社会(自然回復)を作ってきた。田畑を綺麗につくっている生活が美しい!

直島に地中美術館を作った。パリにあるオランジェリー美術館より良い美術館を作りたいと思った。ここは照明のない美術館。漆喰壁を活用。自然光だけで演出した。

自分の原点は六甲山と瀬戸内海だと思っている。

これからの若者は自分の原点になるものを持っていたほうが良い。覚悟して生きた吉川英治の宮本武蔵、和辻哲朗、幸田露伴などの本も自分の原点を形成している。

80年代、直島は枯れ山だったが、植林の結果、現在は緑豊かになっている。瀬戸内海の直島は、付近の工場から排出される亜硫酸ガスの影響で、はげ山状態になっていた。そんな直島に緑を取り戻し、文化の島にしようという試みが始まったのが、1988年。'92年には、安藤が設計したミュージアムがオープンした。現代建築と古建築を共存させながら島を活性化させた。

幼稚園、小学校などの建物は木造にしたいと思っている。縁側をつくると、そこが語り合いの場になる。

瀬戸内国際文化祭のボランティアサポーター「こえび隊」は全て自分達で考え行動しなければならない。今年の祭には延べ100万人ぐらいが来ると予測している。

日本といえば、前は経済成長が特色だったが、現在は長生きが特色になってきた。女性は好奇心が強い人が多い。自分はこういう理想を持っているとか、こういう夢を持っているとかを言うことが大切。心の青春を取り戻しましょう!

日本は今、決断しない、スピードのない国になってきた。直島の宿泊者の20%は外人。彼らは好奇心が高い。

個人が元気にならないと国家は豊にならないと思う!

1980年代に日本人は豊になり、90年代にバブルがはじけ、以降、日本人の好奇心は下降線をたどってきた。

地方は自分たちで自立心を高めねばならない。地域の活性化、東京のものまねを地域で繰り返しても成功しない、それぞれの地域の得意分野を伸ばしていくこと、一人ひとりの自立心と好奇心が地域活性化の取り組みがキーポイントになる。

子供の教育のことですが小中学生には放課後の経験が大切だと思う。今は、放課後、皆塾に行っている。これでは自ら考え行動する自立心が育たない。

直島が美味しくできたのは「情熱」と「持続力」があったから。

今後はアジアと共に生きる!文化外交を続けていきたい!